
エプロン人妻


チアガール
私覚醒！
超爽快！
コスプレ人妻


モグッ!?
ガフガフ！
ガツムシャ
モグパク!!
ゆっくり
食べなさいよ！
多かったら
残して
いいからね
絵美子さんの
ご飯ならいくらでも
入りますよ！
もぐ


ラブホ人妻
前哨戦


電マ編
ラブホ人妻


「あら、もう学校終わり？」
「部活が休みなんで……」
「葵と一緒に帰ってくれば良かったのに」
「はは、多分嫌がりますよ」
この人は朝霧　絵美子（あさぎり　えみこ）さん。
同級生である葵のお母さんだ。
ご近所という事もあり、昔から可愛がってもらっていた。
俺が家庭の事情で一人暮らしを始めてからも何かと面倒を見てくれる。


「今日はご飯食べに来る？自炊も大変でしょう」
「えっ、でも悪いですよ。葵もいるんじゃ」
「あの子は夜までバイト。遠慮いらないわ」
「旦那さんもいらっしゃるでしょうし」
「どうせ残業よ」
「でも……」


「何よぉ……おばさんだけじゃ不満だっての？」
「い、いえ！ぜひご馳走になります！」
葵も旦那さんもおらず、絵美子さんと二人きり。
それが何だか気恥ずかしく、後ろめたくもあった。


「よろしい。ちゃんとお腹空かせてくるんだよ」
「楽しみにしてます！」
じゃあね、と玄関に向かう後姿が劣情を誘う。
俺は絵美子さんに対して親愛以上の念を持っていた。


モグッ!?
ガフガフ!
ガツムシャ
モグパク!!
絵美子さんのご飯ならいくらでも入りますよ!
お店より全然美味しいし!
もぐ
またまた上手いね~!
ゆっくり食べなさいよ!
多かったら残していいからね
いやほんとしかも優しいし綺麗だし……
ケツ揉みてえ
奏ちゃん
えっ!?
アッハイ何でしょう!?
ドキィッ!!
何よ慌てて……
ちょっとお酒飲んでもいいかしら?
あっどうぞどうぞ!


何考えてんだ俺は……
気にせず飲んでください
ごめんね最近眠れなくてさ
奏ちゃんの前ではって思ったんだけど
別にそんな……！
もう子供じゃないですし！
ご飯つぶ付いてるよ
そっそれに！
好きな人だっているし……！
そ、それってまさか……！
あっそういう意味じゃなくて……！
葵の事ね!?
そうなのね!?
えっいやっ……
……いやあ
もうっ！早く言いなさいよ！
奏ちゃんなら私も安心！
……ハハ


いくら幼馴染でもさ
普通はちょっと距離離れたりするじゃない？
でも二人は変わらず仲良しだもんねえ……
えっ
俺いつも叩かれてますけど
それは照れ隠し！
家に帰ると奏ちゃんの話ばっかだもん
奏太奏太ってほんとに嬉しそうにね！
……ほんとに
羨ましいわ……
あっ
そんな一気に飲んだら……
ぐいっ
ほらー……


お酒弱いんだから
風邪引きますよ
ここで寝るー
いやちゃんとベッドで……
なら抱っこしなさい抱っこ!!
ええ!?
アハハ
おばさんをお姫様抱っこ!?
ケラ
ケラ
ヤバい勃つ勃つ
女の子扱いなんて何年ぶりかしら
重くなあい?
ドギ
いや全然
しまった思わず……
パタ
パタ
嬉しい事言うねこいつめ!
こいつめ!
ちょっと危なっ……
エヘヘ


1
はい
着きましたよ
絵美子さん
……
絵美子さん？
お休みなさい
絵美子さん
スー…
葵に連絡
入れときますね
そろそろ…
何か今日は
様子変だったな
悪酔いする人じゃ
ないんだけど
……てか
葵はまだ
バイトかよ！
このままじゃ
帰れねえ……
スマホ
スマホ…
ん……
そ……
奏ちゃん……


ゴク
……おいおい
やめろって
シャレになんねーぞ
ギ!
――でも
……絵美子さん？
寝てますよね……？
スー…
ほんの少し
少し
だけなら――……


ビ
キッ…
ヤベッ……
止まらねえ
むにっ
すっげ……
ブラ越しにこの弾力
にゅむ
ぎゅ～～っ
窮屈で
はち切れそう
じゃねえか


「裸エプロンってあんたねぇ……。男の子ってこう言うの好きなの？」
「大好きですよ！……やっべぇ、超エロい」
ぷっくり立った乳首が薄い布地に透けて主張している。既に受け入れ準備ができてるようだ。
「もう、台所でこんなはしたない事させて。ふざける場所じゃないって昔教えたわよね」
「でもやってくれるんですね」
「だって……」


「壮ちゃんのお願いなら、逆らえないわ……♥」
「え、絵美子さん……」
「さあ召し上がれ……なんてね♥」


俺はたまらず絵美子さんの秘部に舌を伸ばした。
小陰唇を丁寧になぞり、ぬるぬる分泌した愛液をローション代わりに膣口へ舌を侵入させる。
「あんっ♥ちょっ、ダメぇ♥」
「ひゃっ♥あっ♥はあ……♥」
むせ返る様なメスのフェロモンが鼻腔に染み込む。
熟成された膣内は味蕾を刺激する味わいだ。
蜜壺を堪能しながら、クリトリスを舌先で入念に転がす。
「そこっ♥んっ♥いいっ、わあっ♥」
「んむっ、ぢゅっ、ふむっうう……!!」
俺は一心不乱に舐め回した。


「いくッ♥イっひぃ♥イッちゃうッ♥♥♥」
絶頂の潮が噴き出す。
俺は構わず舐め続けた。
「やっ♥ぁあッ♥もっ♥イって、る♥んウッ♥からぁッ♥♥」
身をよじって快楽に耐える姿が愛おしい。
今日はこの可愛い人を、とことん虐め抜いてやろうと思った。


「あぁっ……♥
少し、休ませ……っ♥♥
ぁァあああッ♥♥♥」
膨れきったモノを
強引に捻じ込むと、
一際大きな
唸り声を上げた。
「ふっ！ふぅっ……！
肉穴絡みついて
やべえッ……！」
「はぁっ♥あぁっ♥♥
抉られっ、ちゃっ♥♥
ツてるぅ……♥♥」
「ああッ！
お玉持って下さいッ！
お玉をっ！」
「なっ♥何よっ、
それぇッ♥こっ、
これでっ♥んっ♥♥
いいのっ……？♥」


「うおおおおッ!!」
「いひイッ♥アアッ♥
な、何でぇッ♥♥いっ♥
勢い激しっ……♥♥」
ばんっ
ばんっ
ばんっ
ばんっ
その視覚効果は
絶大だった。
「ぐおぉっ……!
射精ます、中で
射精しますッ!」
「きてっ♥♥んっ♥
来てエッ♥♥♥」


「んひぃいイイイッ!!♥♥♥」
「あぁッ♥はっ♥んぁあ……♥♥♥」
「うおっ、おお……!」
貯めに貯めた精液が搾り取られる。
それでも尚、怒張が鎮まる事は無かった。


「もう壮ちゃんったら……♥
私、あんたみたいに
若くないんだから」
「すいません、つい
盛り上がっちゃって」
騎乗位の往復運動によって、
お腹の肉が上下に
ふるふる揺れている。
それは脂肪でなく、
熟し、育て上げられた
淫塊である。受精の為の
生殖器にすら見える。
「これでっ、
最後だからねっ♥
終わったら、
お風呂入ろっ……♥」
「はっ、はいっ」
甘ったるい言葉は
官能的で、耳もとを
愛撫される心地だった。
妻でなく、母でもない。
この瞬間に限っては、
俺だけの雌で
いてくれるのだ。
「絵美子さん、
動きますね」
たぷっ
たんっ
たぷっ
たんっ
たんっ


「んんッ♥♥
んっ……くぅ♥」
ビクッ♥
ビクッ♥
体重が離れた瞬間、
次の着地と重なるように
腰を突き出す。
「かッ……♥
っはあぁ……♥」
ビクッ♥
ズンッ♥
先ほどは
到達しなかった部位を
亀頭が擦ると、
絵美子さんの顔は
喜悦に歪んだ。
「こっ……れぇ♥
しきゅっ、当たっ……♥
あっ♥はぁあッ♥」
コリュッ♥
コリッ♥
コッ♥
「すっげ、
ううっ、おぉお……」
出産を経た膣道とは
思えない締め付けと、
子宮のコリコリした
感触に思わず唸る。


もっと深い所まで届かせたい。
リビング中に水音が
響き渡るくらいに、
突き上げを加速させた。
「絵美子さん、大丈夫ですか。
痛くありませんか」
「んくっ……♥
へ、へーきよっ♥♥」
でもっ♥私が、
動くからぁ……♥」
俺の動きは手で
やんわりと制された。
ちょっと痛かったのかな。
「だい、じょうぶよっ♥
今度は、私に……♥♥
任せてっ……♥」
ぶるっ♥
たんっ♥
往復にくねりが
加えられ、絵美子さんの
柔らかな膣肉が
擦り上げるように
陰茎を刺激する。
「あっ、それっ、
やばいっ」
たぷっ
腰の律動は
舞のようで、
ある種の流麗さに
満ち溢れていた。


「ふっ♥んっ♥♥
ど、どうかしらっ……♥」
恍惚を悟らせまいと、
口を結んで
耐え忍ぶ様子が
琴線に触れる。
「あぁっ、可愛い、
可愛いです」
温かな慕情がじんわりと
内奥から染みだし、
少しでも絵美子さんを
繋ぎ止めようと、
ますます身に力が入った。
「……ッ♥♥♥
もうっ♥可愛いって、
大人に言う事じゃっ♥
ないでしょっ♥♥」
言葉に反して、
その顔はとても
嬉しそうだった。
たぷっ
たぷっ
たぷっ
たんっ♥
たんっ♥
たんっ♥


（あぁくそっ、この人を誰にも渡したくない……。あの旦那にも、二度と触れさせたくない……！）
黒い衝動がふつふつと煮えたぎる。
臀部を鷲掴みにし、叩きつけるように、下からの突きを再開した。
「あっ♥♥ど、どうしたのっ？♥♥」
「絵美子さん、絵美子さんッ！」
柔肌にかかる指をさらに食い込ませる。
しっかりと、奥まで、俺の子種が届くように。
ぱんっ
ぱちゅっ♥
ぎゅむっ
ぱんっ♥
ちゅぽっ♥


「あぁあッ♥♥
くるっ♥♥来ちゃう♥♥」
「ひゃあッ!?♥♥
乳首いッ♥
や、やめっ♥♥♥」
「おおッ……！
射精ます!!」


「あァッ♥♥あッ♥♥♥
あはぁあああぁあッ♥♥♥♥」
ビクッ
ビクン
ビクン
ビュッビュッ♥♥
ビクッ♥
ビクッ
ビュッビュッ♥

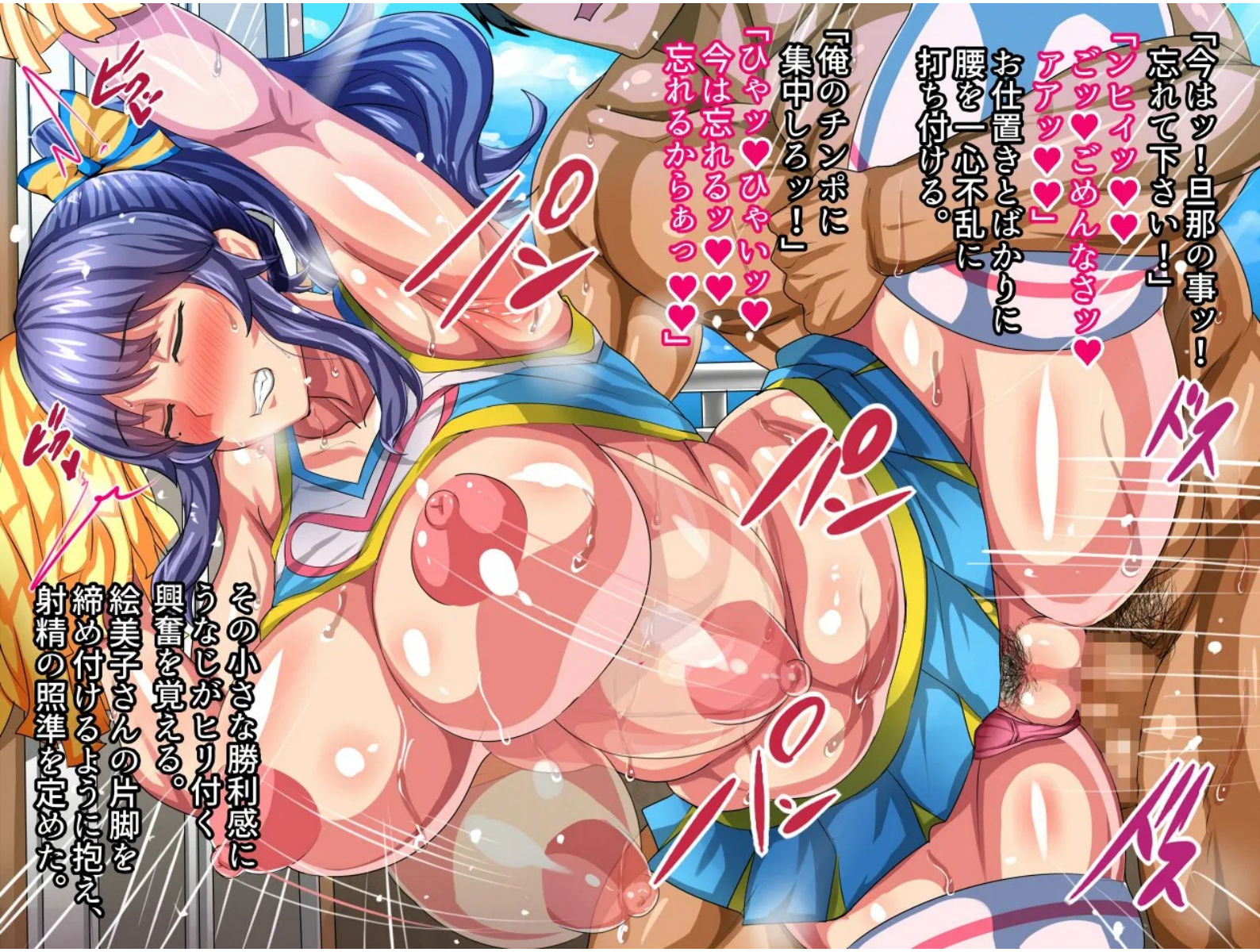

「ぁあっ……♥まっ♥
まだ出てるぅ……♥♥」
「はあっ、はあっ、
はあっ……」
絵美子さんの
濡れた口は大きく
開かれ、行為の
充足感を物語る様に、
粘りのある糸が
光って見えた。
膣から夥しく
流れ出る白濁の波が、
着床の気配を
予感させる。
もし、絵美子さんが
俺の子供を妊娠したら
どうなるんだろう。
その迷妄はしばらく
頭に残り続けた。


「どう？お望みのチアガール姿♥
20年ぶりだと色々キツイわね……♥」
「超可愛いよ、絵美子さん」
かつて、野球部の旦那を
応援する時に着ていたコスチューム。
想い出の品だろうに、
俺が喜ぶならと
すんなり着用してくれた。
ズン
「早くっ♥早くっ♥
ご近所様に
見られちゃうから♥」
ズン
「そうですね、
こんなとこ見られたら……」

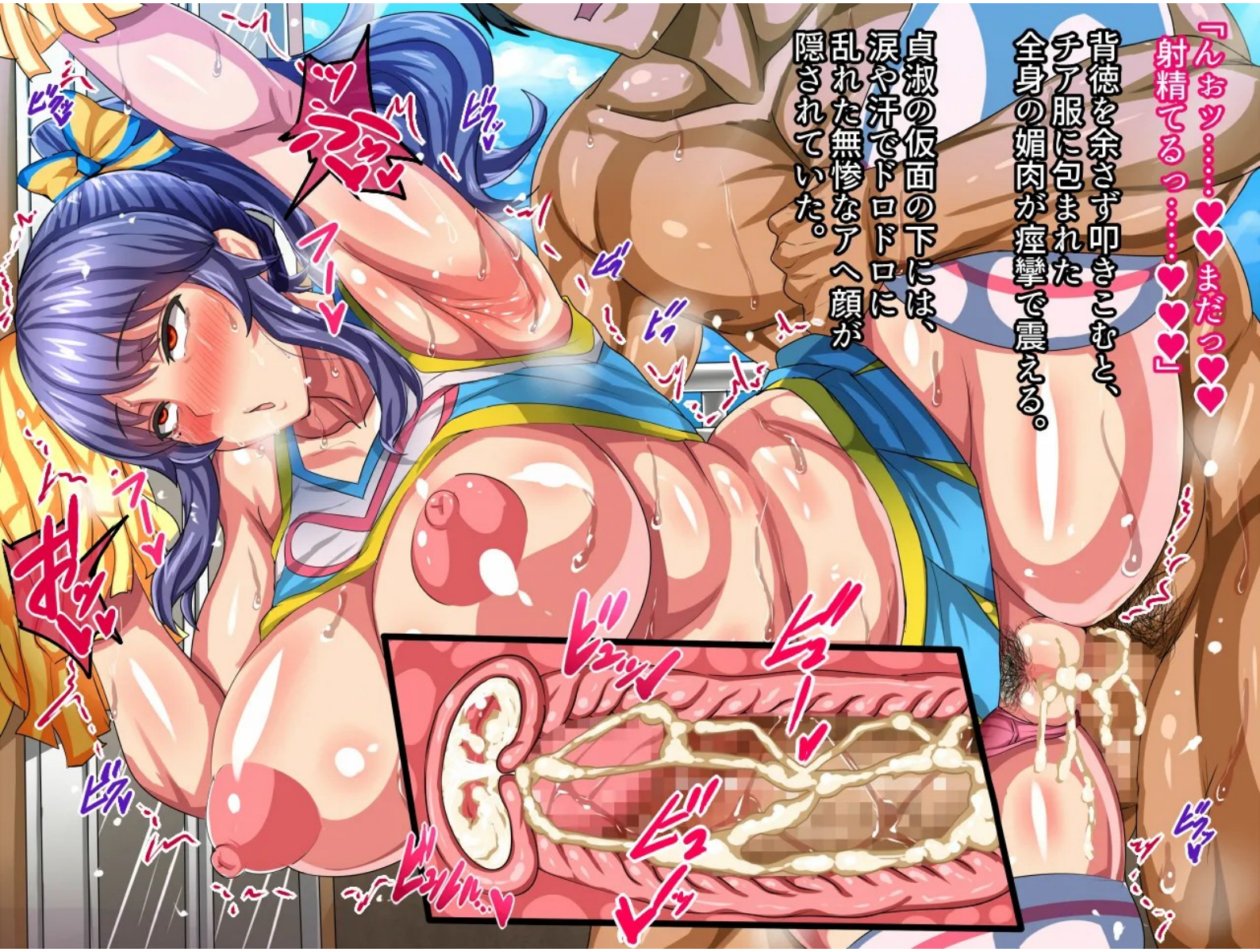

「滅茶苦茶興奮しますねッ！」
ズン
「はアッ♥♥♥」


「もっ♥もうちょっと♥♥優しく……ッ♥」
旦那さんは幾度となくこの姿で声援を受けてきたのだろう。
その苛立ちが抽挿を速めた。
「今日は、この服台無しにしてやりますから……！」
パン
ブルッ
ビン
パン
ブルッ
「……あの人の事っ♥♥気にしてる……っ？」


「……ッ！」
図星だ。
返答代わりに
抉るような一突き。
ボヴォ♥
ビヴ
ビヴ
「ンおオッォオおお♥♥♥」


「今はッ！旦那の事ッ！忘れて下さい！」
「ンヒィッ♥♥ごッ♥ごめんなさッ♥アアッ♥♥」
お仕置きとばかりに腰を一心不乱に打ち付ける。
「俺のチンポに集中しろッ！」
「ひゃッ♥ひゃいッ♥今は忘れるッ♥♥忘れるからぁっ♥♥」
その小さな勝利感にうなじがヒリ付く興奮を覚える。
絵美子さんの片脚を締め付けるように抱え、射精の照準を定めた。


「オラァッ！
ご近所中にメスイキ騒音
響かせろオッ！」
ボン
ズンズン
ばんばんばん


「んおッ……♥♥まだっ♥♥
射精てるっ……♥♥♥」
背徳を余さず叩きこむと、
チア服に包まれた
全身の媚肉が痙攣で震える。
貞淑の仮面の下には、
涙や汗でドロドロに
乱れた無惨なアヘ顔が
隠されていた。


汚れた肉棒を丹念に舐め取らせ、屋内でしばしの休息。
だが絵美子さんと寄り添ってキスしたり、イチャついてる内に次の弾が装填された。
「呆れた……まだやるつもり？」
「元チア部っぽい事、してもらいたいなって」
「応援すればいいの？何を？」
あなたが今跨ってるモノですよと、竿の反りを強める。
途端に絵美子さんの目に熱っぽい羞恥が浮かんだ。


「ここ……葵の部屋なのよ♥
母親にそんな事
させちゃうんだ……♥」
言葉とは裏腹に、
脂が乗った女尻は
小刻みに震え、
竿からは膣口の
確かな湿りを感じた。
「ほら、フレッフレッ
チンポって」
「もう……♥
恥ずかしいわ♥♥」


「フレッ♥フレッ♥
ちん……ぽっ♥♥♥
フレッフレッ♥」
照れながらポンポンを
振るう絵美子さん。
ぎこちない応援に
愚息が奮え勃つ。

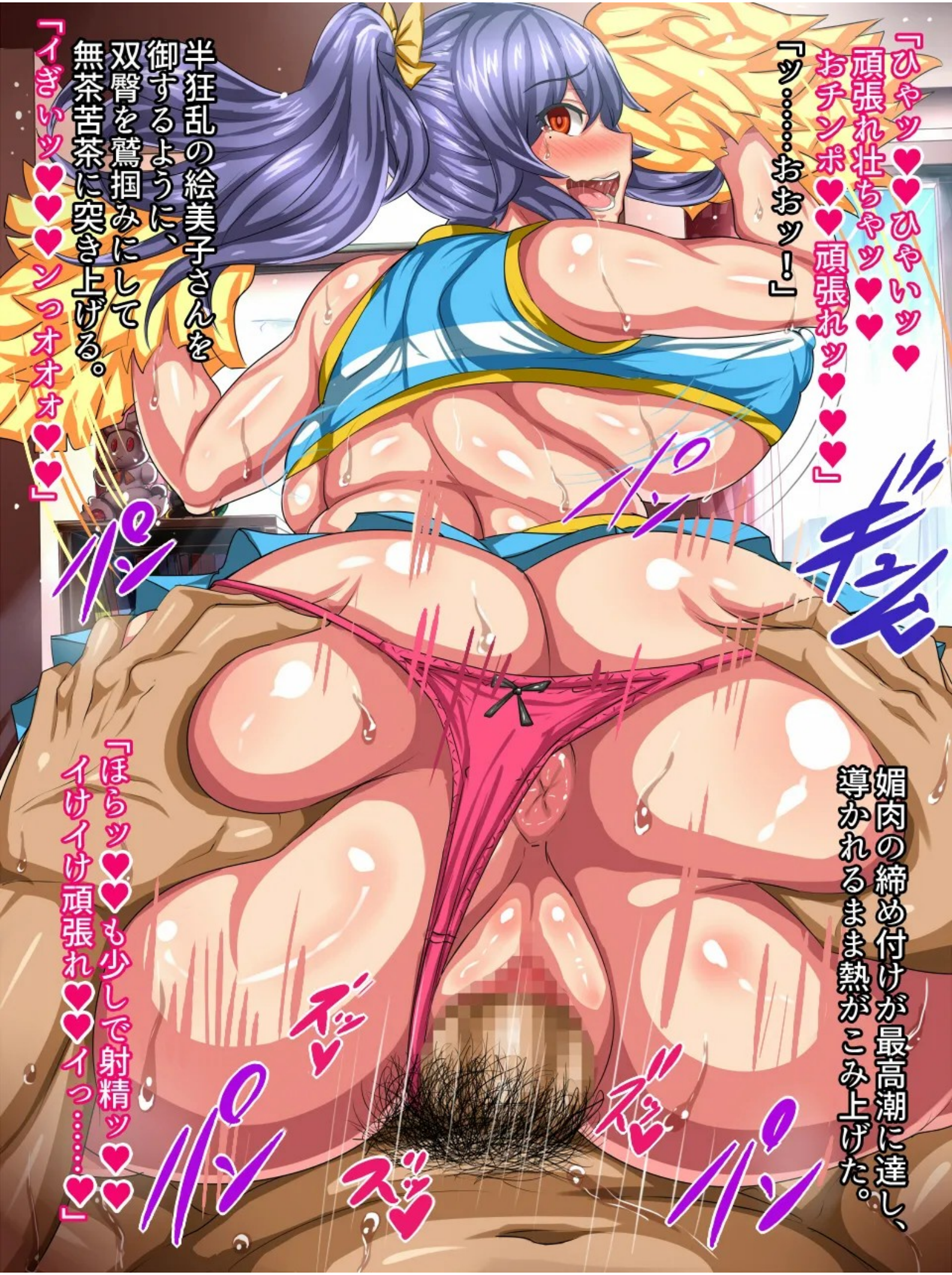

「あぁッ！照れてる顔も最高に可愛いっす！」
「も、もういいでしょ……？思ったより恥ずかしいわコレ……」
ドゲン
ドゲン
むっちりチアコスを纏った人妻の愛すべき羞恥が肉欲に火をつけた。
「……足りないですよ」


「もっと絵美子さんの
恥ずかしいとこ
見せて下さいッ！」
「んぁあッ……♥♥」
「ほらほら！自分の
エロ肉が蹂躙されるの
応援して！」
ビクビク
ぼ


「やっべ、それチンポにめっちゃ来ます！」
「フレッフレッ♥壮ちゃんッ♥子宮目がけて♥♥突き進めッ♥♥♥♥」
ズッ
ズン
ズン


間の抜けた鼓舞と一緒に
円熟した甘肉が踊り狂って、
それだけで射精してしまいそうだ。
膣路での往復が速まる。
鈴口がぶにゅりと
子宮と接吻する。
「ンおオッ♥♥あぁッ♥♥」
敏感な雌スイッチを
押し込む毎に、
淫らな舞いがその軌道を
大きく変えた。


「はは、ケツ穴弄るとどうなるのかな？」
「おッ♥♥お尻らめッ♥♥」
ヒクつく肛門の淵を指で丁寧になぞると、絵美子さんの肩がビクリと震えた。
間髪入れず、親指を第一関節まで挿入。
「ンオおおおッ♥♥♥」
途端に大きく体をのけ反らせ、腸壁の快楽に獣じみた咆哮をあげた。
「ほらッ！応援はどうしたんです！」


「ひゃッ♥♥ひゃいッ♥
頑張れ壮ちゃッ♥♥
おチンポ♥♥頑張れッ♥♥♥」
「ッ……おおッ！」
半狂乱の絵美子さんを
御するように、
双臀を鷲掴みにして
無茶苦茶に突き上げる。
「イぎぃッ♥♥ンっオオォ♥♥」
媚肉の締め付けが最高潮に達し、
導かれるまま熱がこみ上げた。
「ほらッ♥♥も少しで射精ッ♥♥
イけイけ頑張れ♥♥イっ……♥」


「イッグ……ウウウウッ♥♥♥♥♥」
ドピュ


応援の甲斐あって、
膣から溢れ出る程の
大量の精が迸った。
「おッ♥♥ンおおおおッ……♥♥♥」
極度のアクメに達したのだろう、
大きなエビ反りで頭が
天井に届かんまでの勢いだ。


まだ硬さが残る肉棒を
引き抜くと、ブポッと下品な音を立て、
愛の残滓が流れ出た。
「んくぅっ……♥♥おオっ♥♥」
発汗で分泌された雌の湿りが、
青春を飾ったチア服を
深い青に色濃く染める。
「ふぅッ……どうですか、
旦那を応援した服でのセックスは」
ドロォ…
「はアッ、はぁッ……♥♥
これッ♥病みつきに
なっちゃう……♥♥」
その眼差しに、かつて見せた
学生時代への懐旧など
微塵も浮かんではいなかった。


「ちょっとこんな所で……！」
はっ♥
はっ♥
「すいません
ちょっと我慢できなくて
……ゆっくりヤりますから」
「あぁんっ♥♥♥
いきなりっ♥深っ……♥♥」
私が止めなくちゃ
いけない立場なのに。
こんなバブルの残骸みたいな
服着て火照った体は
彼の侵入をあっけなく許した。
ズブッ♥
ドクッ♥


「ひぐっ♥はあっ♥ァああっ♥
アソコがっめくれちゃうっ♥♥」
「壁で肌擦るといけませんからね、
早く射精しますからっ……」
そう思うなら
もう少し我慢すれば
いいのにっ……♥
彼の僅かな理性と裏腹に
腰遣いは苛烈さを増して、
結合部から弾けた飛沫が
アスファルトに飛散する。
不衛生な路面が愛液で
塗れる背徳感と、
彼から激しく与えられる
官能とで頭がぐちゃぐちゃに
なって……。


「んッおっオぉ♥♥ほぉおおオォッ
おォおお～～～ッ♥♥♥♥」
おぉ♥
おぉ♥
ビッ♥
ビッ♥
ビッ♥
ビッ♥
ビッ♥
獣染みた声で果てた。
逝る精液。なおも続く抽送。
支えられた脚が思わず跳ね、
たまらず彼にしがみ付く。
「そんな声あげちゃダメですよ絵美子さん。ほら、あっちの人が見てる」
もうそんな事は些細な問題だった。早くこの子にちゃんと抱いてほしい。
下品なネオンが初めて愛おしく感じられた。


「奏ちゃんったら……♥
あんなに激しく押し付けるから、
擦りむいちゃったじゃないの……♥♥」
「すいません、俺
抑えが利かなくなって……」
ドキ♥
ラブホテルの一室。
彼の為に用意した扇情的な下着に
着替えるや否や押し倒され、
愛撫が始まった。
ドキ♥
下腹部から始まり、
丹念に首筋まで。
子犬みたいにペロペロ体中を舐められて、
発情した体は冷めることなく
むしろ彼のモノを受け入れる
期待とドキドキで蕩けそうになった。


「ねっ、ねえっ♥♥
舐めるのもいいけどふやけちゃうからっ♥
もっと、他の部分もっ……♥♥」
「はは、他の部分じゃ
分かりませんよ。
どこですか？」
分かり切った答え。
彼に教え込まされた
答えをたまらず叫ぶ。
あんっ
あっ
ぐぐっ
ぐぐっ
「おっ……♥おマンコッ♥♥
おマンコいじってッ♥♥
奏ちゃんの指で
ぐちゅぐちゅしてえッ……♥♥」
「可愛いな
絵美子さんは……ほらッ」
ずにゅり——と指が
花弁に侵入する。
短く深いアクメが一気に
脳裏までかけのぼった。
「んんんんッッ♥♥♥♥♥」


「すっげえ反応ですね、
何回でもイかせてやりますから
ちゃんと下品な声上げて下さいね」
おおぐぐ
ぐいっ
ビグッ
ビグッ
ビグッ
ビグッ
「んあああッ♥♥ゆびっ♥♥
そこっだめっ♥
すごいッ♥おッ♥♥
いっ、イィイイヒッッ♥♥……♥♥」
一番キモチイイところを
執拗に、的確に擦られて。
でも逃れる事は許されず、
体を抑え込まれて。
「ひゃあああッ♥♥♥
いまっ、そんなとこッ♥♥
くびなんてッ♥♥なめッ、
なめないでえええッ♥♥♥」
ぐちゅっ
ぐちゅっ
ぴちゃぴちゃいやらしい
水温が耳に響いて、
ぐちゅぐちゅ膣やクリが、
何度も何度も
掻き撫でられて――
もう、あっという間だった。


ビクン
ビクン
ビクン
ムニュ
ムニュ
ムニュ
ヒルカエシ


「はっ♥はッ……♥
はあぁぁぁぁっ♥♥♥
お〃ォっ♥ほおっ♥」
「指だけでこんなに
イッちゃうとか……
恥ずかしくありませんか？
ほら、マンコすげえ
洪水みたいになってますよ」
「ひゃあああッ……♥♥
みないでえっ♥♥
そっ♥奏ちゃんが
激しくすりゅから
でしょおおっ……♥♥」
恥ずかしさと気持ち良さで呂律が回らない。
私を責め立てる言葉と、
背筋に当たっている彼の肉棒の熱で、
「スイッチ」が入ったのだと分かった。
「休んでる場合じゃないでしょ絵美子さん。
こんな軽い愛撫で参ってたら、
これ使ったらどうなっちゃうんでしょうね」
「はっ……♥♥へえっ？♥♥」
……これ？使う？
疲弊した頭では彼が
何を言ってるのか呑み込めない。
何を……何を使うんだろう？
もう、私はこんなにも
気持ち良くなっているのに――


「んぎッひいいい


ヴィイイイイイイイイイイイイイイイイッ……
「んぐッひゃあああああぁぁぁッ♥♥♥♥♥♥♥♥♥
まっ、まっひぇッ♥♥♥やめッ♥まらイッ♥♥
イっひゃばかりらかひゃあああ
あぁぁぁあぁぁあァァアッ♥♥♥♥」
辛うじて繋ぎ止めた理性の鎖が
強引に引きちぎられる。
ビクッ
ビクッ
年上としての矜持とか、
それまでの人生で培った「大人」として
あるべき節度なんて……
この暴力的な快楽の前では藁の家だ。
「らめッッ♥♥あひゃッ♥♥
あッ、あらまおかしくッなりゅうッ♥♥
アあァッ♥♥
アソコダメになっちゃうッッ♥♥♥」
「すッげ……ほら、威力上げますよ！
もっとダメになってくださいね」
ビッ
ビッ
「んぐぎっッ！？♥♥
イッ、イいいいひぃぃイィ
いぃぃイイイいいいイッ！！！？？
♥♥♥♥♥♥」


無慈悲な機械音が一段とうなりを上げる。
クリから伝わる振動が直線的なアクメとなって子宮を、頭を貫く。
視界が定まらない。思考がおぼつかない。
「じたばたしないで下さいよ。ちゃんと電マが当てられないでしょう」
ビクン
ビクッ
「イやァ〜ああアあ〜ァアアああ〜ァァあ〜ああァ〜ッ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」
ただただ「キモチイイ」が肉体の隅々を駆け巡り、堪らず少女の甲高い啼き声をあげた。
「叫んだってやめませんよ。そら」
ヴィッ、ヴィヴィヴィヴィヴィヴィーーーーーーッ……
オラァン
「おッ♥♥♥♥♥おおおお〜〜おッ♥♥♥んォっオオ〜オオオ〜オ〜ッ♥♥♥」
咎めるかのようにクリに押し付けられた振動で更に強くアクメが深まる。
手足を封じられ、行き場を失った熱いほとばしりが私の子宮でどんどん膨らみ――


「イヒィィいいい〜〜ッッッ♥♥♥♥
イググイグイイッッッッ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」
バチッ
バチッ
ドルッ
ドルルル


みっともなく分泌物を撒き散らして、
ベッドをぐしゃぐしゃに汚して、
私はこの日で一番の絶頂を迎えた。
「はあッ♥♥はあッッ♥♥♥
んはぁあああッッ……♥♥♥」
「めちゃくちゃイきましたね、絵美子さん。
そんなにこれ良かったですか？」
「ひゃあっ♥♥うっ♥♥うんっ……♥♥
これっ♥しゅごいよおおおっ……♥♥」
「……ふーん」
脂汗がひどい。
何とか一息ずつ呼吸を試みてるのに、
下腹部の強烈な余韻が
邪魔して息が絶え絶えになる。
腰が砕けて奏ちゃんに
身を預ける形になってしまう。
不服そうに立ち上がり、
彼は反り立った肉棒を
見せつけてきた。